

徳島大学病院泌尿器科副科長



高橋 正幸

腎臓がんは主に血流に乗って広がります。肺が最も転移しやすい臓器で、その他に骨、肝臓、脳、すい臓、リンパ節にも転移することがあります。転移に対する治療は主に、手術、薬

答え

腎臓がんは、手術で完全に切除できた場合でも転移が出現する可能性があります。しかし、今のところ再発を予防できる薬剤はありません。再発、転移を早く発見するために、CTなどの定期的な検査を行います。



質問

70代の女性です。腎臓がんが手術し、片方の腎臓を摘出しました。幸い転移はなく経過観察中ですが、腎臓がんは抗がん剤治療が効きにくいと聞きました。もし転移した場合、どのような治療になるのか心配です。転移した場合の治療法について教えてください。

腎臓がんが転移したら

手術で摘除か薬物療法

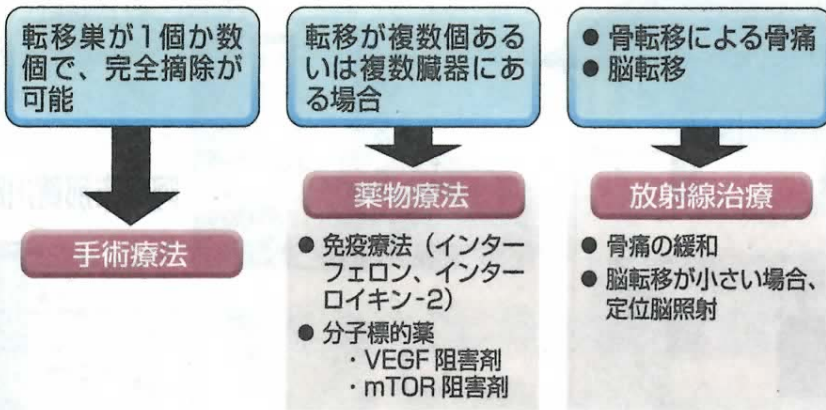
現在、薬物療法の主流となっているのは分子標的薬という種類の薬です。がん細胞は自ら増

殖していくために、がん細胞内のある分子が活性化しています。分子標的薬は、がん細胞が増殖するために活性化している分子を抑える薬剤です。腎臓がんに対する分子標的薬は、日本では2008年に導入されました。大きく分けて血管内皮増殖因子(VEGF)と、ORという分子を抑える薬剤

転移の数が1個あるいは数個までで、転移巣が摘除可能であれば、転移巣摘除術により生命予後が延長することが報告されています。そのため、完全に摘除可能であれば、転移であっても積極的に手術で摘除する意義があります。根治も期待できます。

手術ができない場合は薬物療法が適応となります。腎臓がんは抗がん剤に抵抗性を示します。そのため、従来、インターフェロンやインターロイキン-2などの免疫療法が主体となっていました。この免疫療法は、腫瘍を小さくする効果はそれほど高くありませんが、肺転移のみの場合には腫瘍が消えてしまうことがあります。現在も使用されています。主な副作用は発熱、倦怠感、長期に使用した場合にはうつ症状が出る場合があります。

腎がん転移巣の治療



一方、mTOR阻害剤はVEGF阻害剤で効果がなくなってきたときに投与されることが多く、腫瘍を小さくする作用は弱いです。分子標的薬の投与で腫瘍が完全に消えてしまうことはまれなため、内服を一時的に休んだり減量したりすることで、副作用をコントロールしながら、長期に投与を継続していくことが大事です。

VEGF阻害剤は腫瘍を小さくする効果が高いため、腎臓がんの転移に対して最も多く投与されています。主な副作用は高血圧、下痢、食欲低下、手足症候群(手のひらや足底に発赤や痛みが出現する)、甲狀腺機能低下症、倦怠感などです。分子標的薬の投与で腫瘍が完全に消えてしまうことはまれなため、内服を一時的に休んだり減量したりすることで、副作用をコントロールしながら、長期に投与を継続していくことが大事です。

質問募集 がんに関する悩み「徳島がん対策センター」がお答えします。質問内容を詳しく書き、住所、氏名、年齢、性別、電話番号を明記し、〒770-8557 徳島新聞社文化部「がん相談」係へ。紙上に住所、氏名、電話番号は掲載しません。同センターへ電話088(093)943000でも平日午前8時半〜午後5時に受け付けています。